

上野動物園の歴史を作ってきたのはクマ 大森山動物園には在来種の保護や飼育も期待



東京都恩賜上野動物園 ● 園長 小宮 輝之
(社)日本動物園水族館協会会長

明治15年の開園から125年、開園に向けた準備期間まで入れると135年の歴史がある上野動物園だが、開園のきっかけは、西洋に扉を開くため「万国博覧会に出品しよう」ということであった。

135年前の明治5年、ウィーン、パリの万国博覧会に出品する物品が湯島聖堂に集められた。ウシは但馬牛、北海道からはアイヌの飼育係付きでヒグマという具合に、各地自慢の動物も集められた。10年後の明治15年、それらをもとに上野動物園が開園するのだが、開園当初から、ヒグマ、ツキノワグマ、チョウセンクロクマ(ヒマラヤグマ)などのクマがいた。

当時、博物館などは農商務省の所轄であったため、上野動物園も農商務省の管轄であった。4年後、殖産関係のものは農商務省、歴史や美術関係のものは宮内省となったが、こうした流れの中で、動物園を切り離すことも検討されていたようだが、動物園が一番収入を上げていたため、それまでどおり天皇家の動物園となった。

天皇家の動物園ということもあり、その後の上野動物園には、各国からシフゾウ、ラクダ、ゾウなどが贈られることになった。そのなかに、シヤム、現在のタイから贈られた、名前もない、ただ「あばれ象」と呼ばれていたゾウがいた。「飼えない動物は射殺するのが当たり前」という考えの外国人などからは、「どうしてそのようなゾウを飼うのか」という抗議もあったようである。このゾウは、関東大震災後、浅草の花やしきに貰われていったのだが、60数年生きた。これは世界的に見ても長生きの記録である。

こうした例からも、日本と海外の動物観の違いを見い出すことができる。「たとえ縛り

付けてでも最後まで生かす」と考える日本人と、「飼えなくなったら、手に負えなくなったら殺す」と考える海外の違いである。同じようなことはヨーロッパの動物園でもあり、例えば、シカを動物園内で自然に繁殖させるとどんどん増えるのだが、これを殺してリカオンのエサにしている例がある。要は「自然界の状況・関係と同じ」という理論である。こうしたことは、日本人にはできない。

さて、その後の上野動物園であるが、関東大震災後、宮内省が動物園を持ちきれなくなり、今から約80年前、東京市へ下賜となった。東京市へ下賜となった上野動物園では、ハーゲンバック動物園を参考に、初めて檻のない猛獣舎として、シロクマ舎を作った。海外のものを参考にしながら一生懸命に作ったからなのか、このシロクマ舎の一部は今でも使われている。このシロクマ舎はあと20年は生かし(存続させ)、「日本にも100年以上も使われている獣舎がある」ということを示したいと考えている。

時代は過ぎ、第2次世界大戦中の上野動物園といえば、ゾウやライオンなどの猛獣が処分されたことを覚えている方がいるかもしれない。昭和18年に27頭の猛獣を処分しているのだが、そのうちの8頭はクマで、処分後、その場所ではブタを飼っていた。3年後、疎開していた猛獣の復員もあり、新潟と岐阜に疎開していたクマの復員が最初であった。

これは余談だが、人気のパンダも実はクマである。DNAで調べてみてもやはりクマであり、これをあえてパンダ科としたのは、政治的・経済的分類ではないかと考えている。

動物が不在ということについては、ライオンの例もある。上野動物園では「ブーストック計画」に取り組み、ライオンを多摩動物園